

橘糸重 短歌作品集 (最終更新：11月14日)

西暦	発表年	月	題		掲載誌
1889	明治22年	1月	浦松	松がえに声うちそふる白波は鼓がうらの調べなりけり	日本之女学
1889	明治22年	4月	橋辺梅	夕まぐれそぞろありきの橋つべに梅が香ぬるくはる風ぞ吹く	やまと錦
1889	明治22年	9月	海の辺に花のさけるかた	すみよしといふもうべ也秋ながらうきをしら菊岸に匂へる	日本之女学
1890	明治23年	1月3日	往時如夢	すぎてこし昔しのべばあはれただひと夜のゆめのここちこそすれ	日本之文華
1890	明治23年	1月15日	川螢	風ふけば岸の卵のはな花ちりてほたるみだるる玉川の水	千代田歌集
1890	明治23年	1月15日	朝雁	このねぬる朝風寒く見渡せばくもみ遥にかりはきにけり	千代田歌集
1890	明治23年	1月15日	河月	角田川中洲のあしをこぎくれば浪の綾瀬に月ぞただよふ	千代田歌集
1890	明治23年	1月15日	川亀	大井川松の木かげに所えてこころゆたかにあそぶ亀かな	千代田歌集
1890	明治23年	1月15日	寄風祝	芦原やうきふし知らぬ君が代は風の音さへのどけかり鳧(けり)	千代田歌集
1890	明治23年	1月18日	橋辺梅	夕まぐれそぞろありきの橋のへにうめが香ぬるくはるかぜぞふく	日本之文華
1891	明治24年	3月	寄風祝	芦原やうきふししらぬ君が代は風の音さへのどけかりけり	宝田集下
1891	明治24年	6月	橋辺梅	夕まぐれそぞろありきの橋の上に梅が香ぬるく春風ぞふく	婦女詞藻第一編
1891	明治24年	6月	山家蕨	都人かへさわすれて手をるめりわが山さとの軒のさわらび	婦女詞藻第一編
1893	明治26年	7月	茶摘	木の芽つむ時来にけらし山城の宇治のさと人袖かをるなり	千代田歌集第三編
1893	明治26年	7月	嶺	時しらぬ越の白嶺はふる雪の積りて名とはなれるなりけり	千代田歌集第三編
1894	明治27年	2月	夏懐旧	袖乾くひまこそなけれ梅雨のふりにしことを思ひいでつつ	明治歌集
1894	明治27年	4月	鶯花契万春	桜田の花のこずゑに大君のよろづ代うたふうぐひすのこゑ	銀婚式賀冊
1894	明治27年	5月	谷椎柴	谷かげのみ雪に跡の見ゆるかな椎柴とりにひとやかよひし	明治歌集第二編
1894	明治27年	7月	音楽学校にいりける日	いそしみていざや進まむ糸竹のよに抜出んふしはなくとも	明治歌集第三編
1894	明治27年	10月	○	かねてよりかくと思へど海も陸もかちぬと聞ぞ嬉しかりける	征清歌集
1896	明治29年	4月	浦波	松がえに声打そふる白浪はつづみがうらのしらべなりけり	伊勢名所和歌集

1896	明治29年	4月	野鶯	こころをばかけてこそきけ豊久野の松の梢の鶯の声	伊勢名所和歌集
1897	明治30年	3月	浅雪	春はまだ浅茅が原の風さむみこそ見しままにのこる雪かな	いささ川
1897	明治30年	4月	梨	唯一木ここの春を過しつつさびしくゑむかつまなしにして	いささ川
1898	明治31年	1月	菊	つちかひし母君まさでこの秋はちひさくなりぬにはのしら菊	いささ川
1899	明治32年	1月	折にふれたる	いなごとぶ田川の岸に咲きにけり見る人もなきみつたでのはな	やまとにしき
1899	明治32年	1月	菊	つちかひし母君まさでこの秋はちひさくなりぬ庭のしらぎく	やまとにしき
1899	明治32年	1月	氷	山川に風のときあらふもみち葉をさながら縫て氷りゐにけり	やまとにしき
1901	明治34年	2月	ちひさき花	ぬば玉のやみ夜の暗にうづもれて思ふまにまに泣くよしもがな	竹柏園集第一編
1901	明治34年	2月	ちひさき花	わが命きえぬかぎりはこのむねの此苦しびのつきずやあるらむ	竹柏園集第一編
1901	明治34年	2月	ちひさき花	心なくてすぎなんものを人なみにおもひあるこそ苦しかりけれ	竹柏園集第一編
1901	明治34年	2月	ちひさき花	草がくれつつましげにも咲出でしちひさき花をかざしにはせん	竹柏園集第一編
1901	明治34年	2月	ちひさき花	人しれぬ露にかたぶくさま見ればおなじすくせの花もありけり	竹柏園集第一編
1901	明治34年	2月	ちひさき花	つちかひし母君まさでこのあきはちひさくなりぬ庭のしらぎく	竹柏園集第一編
1901	明治34年	4月	春風	もえいでし垣の小草のささやかにささやくほどの春風ぞふく	女学世界
1901	明治34年	8月	百合	一本に二つ咲きたるさゆり花思ふどちにて何かたるらむ	心の華
1902	明治35年	5月	ちひさき花	恐ろしき名をおはされて捨られてしげみにひそむ鬼あざみ哉	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	いへばとて聞しる人やあらざらむ此世のかぎり胸にひめばや	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	おもひ出も望もなくて経ぬべくはなかなか安き此世ならまし	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	我身一つ入るばかりの小舟うけて水のまにまにゆかんとぞ思ふ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	さまざまに思ひ乱れしはてはただ弱きころのうらめしき哉	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	身にせまるのろひの声よあざけりよいつこまでとか我をおふらむ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	いさぎよく思ひすてつと思ひしを何に残りしなみだなるらむ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	罪なるか罪ならぬかのたゆたひにむなしく暮れぬ今日の一日も	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	一つ消え又一つきえぬつくづくとながむる空のちひさなる星	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	葉がくれの名もなき花に命かして其ままもろくちるよしもがな	竹柏園集第二編

1902	明治35年	5月	ちひさき花	人にそむきおのれにそむきゆく道のつひのとまりのいかにああるらむ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	をさなくて住みし山ざと箱庭におぼろけながらうつし見る哉	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	消のこるいのちの程とかきそめしわが晝は成らず病おもりぬ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	ひろき世にひとり残りて身も老ぬ今はの水をたれにもとめむ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	一もとにふたつ咲きたるさゆり花思ふどちにて何かたるらむ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	木がくれに山鳩なきて手向けつる花の香さむしゆふぐれの風	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	日々に犯し日々に悔たる罪とがの更にわが身をせむる夜半哉	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	いたづらの昨日の悟り今日のまどひはかなきものは心なりけり	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	たえだえの望の光つひに消えてくらく寂しきわがゆくて哉	竹柏園集第二編
1902	明治35年	5月	ちひさき花	いふべくもあらぬ此思ひいはずして幾たび人にあやまたれけむ	竹柏園集第二編
1902	明治35年	6・8月	○	雨くらき藪の木かげのたまり水椿の花の多くしづめる	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	吾かさにふれて碎けし玉椿はかなきえにし哀とぞ思ふ	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	花菫つみはしつれど残れるがいかに思ふとかへり見る哉	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	雨風にこぼれてまひて花と蝶天地のはてに別れつる哉	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	大寺のさびしき暮を雨にぬれて老いたる人の墓詣でする	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	誰が為にたれ手むけけんたふれたるそとばの前の新らしき花	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	歌の晝に人のささめく中にありて文字もしらぬ身ひとり悲しき	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	何ならん耳すます程に遠くなりぬあやしの声の雨にたぐひて	心の華
1902	明治35年	6・8月	○	あかく暗く風のままにまにゆらめきて灯ゆくよ藪かげのみち	心の華
1903	明治36年	2月	山	雪ふぶく三里の山路夕べこえてやみたる乳母に逢ひにゆくかな	女学世界
1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	つまれけりすてられにけりふまれけりすく世はかなき名もあらぬ花	心の花
1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	世のさがに杖うばはれしめしひわれゆくべき方もおもほえぬかな	心の花
1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	あたたかき春の光に垣こえて野にくるひたる蝶に罪ありや	心の花
1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	幸なさのわれに似し人もしあらばかたらむと思ふわが思かな	心の花
1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	思ふままに泣かばしばしは慰まむ涙かれたる身をいかにせむ	心の花

1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	願はくは一度逢ひてゆるされていさぎよく世をさらむとぞ思ふ	心の花
1904	明治37年	5月	名もあらぬ花	情あらばとふなあばくな憂き事の限をひめし胸のおくつき	心の花
1904	明治37年	5月8日	○	情あらば問ふなあばくな憂き事のかぎりをひめし胸のおくつき	読売新聞
1904	明治37年	5月8日	○	幸なさのわれに似し人もしあらばかたらんと思ふわが思ひかな	読売新聞
1904	明治37年	6月	○	わくらはに人と生れし我すくせこのすくせこそ悲しかりけれ	心の花
1904	明治37年	6月	○	おもひあまりふともらしつる一言をくむ人ありと思ひかけきや	心の花
1904	明治37年	6月	○	よわりゆく心をわれとはげましてさんげの書をつづる夜半かな	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	いはぬ思ひいはぬなげきのもしあらばひそかにかたれ山ぶきの花	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	大寺のいてふの落葉まひたちてうき世恋しきゆふ風ぞふく	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	半をへしわが世の旅のつらかりき今ゆくさきに何かまつらむ	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	この上の何のくるしび何の耻しのび尽しし身にし非ずや	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	また一日苦しき命加ふべくあけゆく空のうらめしき哉	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	なるままになれよと且は思ひつつなどこの心うちすてがたき	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	むねにあまるじび苦しびよかなしびよ母君ならでたれにか告げむ	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	告げまつるこのかひなさを苔の下にあはれ何とかきこしめす覽	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	わが病いえずときけど母君も今はいまさずこころ安き哉	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	のぞみとふ望は失せぬいとせめて今はに安きころともがな	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	たへがたき胸のなやみをまぎらすと雲の行へをひとりみるかな	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	ほほゑみてすごすべき世ぞ何にかく悲しきことを知はじめけむ	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	わが心神ぞしらさむ人の世にいひとく術のなきが悲しき	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	消えてゆくしらべにのりて久方の空のはてまでゆく由もがな	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	そらにきゆるしらべの中にたぐふべくは嬉しかるべきわがいのち哉	心の花
1904	明治37年	8月	雲のゆくへ	ただひとつひとつの音のかたきにも我身のろはしきこの夕べ哉	心の花
1904	明治37年	9月	人のまぎれ	身にそはぬ響それさへ苦しきをあなわづらはし人のうらみの	心の花
1904	明治37年	9月	人のまぎれ	人しれず人のまぎれに見おくりてしづ心なきわがおもひかな	心の花



1904	明治37年	9月	人のまぎれ	わがうれひしばし忘れて人の上に涙をそそぐ夕まぐれかな	心の花
1904	明治37年	9月	人のまぎれ	けがさじよ神よりうけしこの心わが身このままくちは果つとも	心の花
1904	明治37年	9月	人のまぎれ	ことさらに憂ひある胸にひびけとてつくらむものか入相のかね	心の花
1904	明治37年	9月	人のまぎれ	嬉しきや悲しきやとて昔わがいなみし人のおもかげにたつ	心の花
1904	明治37年	9月	人のまぎれ	こぞの秋はじめてとひし父君のおくつきこひしあはれ夕かせ	心の花
1904	明治37年	9月19日	○	うつらうつら辿るともなき垣根みち君があたりの灯火のかけ	読売新聞
1904	明治37年	9月19日	○	けがさじよ神よりうけし此心我等此儘朽ちは果つとも	読売新聞
1904	明治37年	9月19日	○	去年の秋はじめてとひし父君のおくつき恋しあはれ夕風	読売新聞
1905	明治38年	1月	とこやみ	ひとり思ひひとり悔みてひとりせめてひとり罪なふわがこころ哉	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	とこやみの暗にをやすめわが心なまじひの光そもや何もの	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	さらばとていかがすべきひたすらにわれは我が身をうらむ斗ぞ	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	かなしさの限をききて別れ来し其夜おぼゆる雨のおとかな	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	つらけれど身をきる斗(ばかり)つらけれど君が為なりさらむとぞ思ふ	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	わた中の人なき島にひとりすみて命のかぎりきみをまたまし	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	人をうらむ心しもたばいかばかりわが此胸のやすけからむを	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	かくまでのわが身のはてを見ても思へみなし子安く過されむ世か	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	つめたきは石のさがなり何しかも其冷たさをうらみたりけむ	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	光なき光をつひのいのちにて名もなき星のとはに安けき	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	思ひ思ひ思ひつかれて墓に入らば苔の下にも思ひつきせじ	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	わが為になく人なきをやすさにて何処の果に身ををはるべき	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	たづねなき誰かはしのぶわが墓に文字もあらずな石もあらずな	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	おもねりにしひたる耳をしばしあけてまことの声もきけよとぞ思ふ	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	くまもなき望の月かげいかなればわがこの胸のほかにてるらむ	心の花
1905	明治38年	1月	とこやみ	忘れじと思ふ思ひよいつしかと忘れゆくべきはじめなるらむ	心の花
1905	明治38年	4月	夢	夢にあひし人もやあると夢に似し林のあたりそぞろさまよふ	心の花

1905	明治38年	4月	夢	いひしらず美はしかりきしかはあれどたちまちきえし夢をしぞ思ふ	心の花
1905	明治38年	4月	夢	しばし世のおきてのままに別るとも友とばかりは思ひ出でよ君	心の花
1905	明治38年	4月	夢	花の夢にうつらうつらとさそはるるねぶりよとはにさめずしもあれ	心の花
1905	明治38年	4月	夢	限りなくうれしと思ひし一時の思ひ出つらき夕ぐれのそら	心の花
1905	明治38年	4月	夢	さづかりて又奪はるる人の命たがたはふれのしわざなるらむ	心の花
1905	明治38年	4月	夢	さりげなくさらばとのみに別れゆく人の情をかなしとぞおもふ	心の花
1905	明治38年	4月	夢	きくままにおのれもあらず人もあらずしばしただよふ天つ神の国	心の花
1905	明治38年	4月	夢	身をしらぬ望いだきてあこがれし昔やさしきわが思ひかな	心の花
1905	明治38年	4月	夢	よの人はよししらずともわが心なきものにして独しのばん	心の花
1905	明治38年	4月	夢	きえていにし望やいづらなつかしく且は恋しき思ひ出にして	心の花
1905	明治38年	4月	夢	わするべき憂ひにはあらじ何かもまぎれんとおもふ心なるらん	心の花
1905	明治38年	6月	罪	胸にみつわがこの思ひなくばいかに安けかるべし寂しかるべし	心の花
1905	明治38年	6月	罪	はたすべき此世のおひめいつかゆりてゆくべきかたは母坐すかた	心の花
1905	明治38年	6月	罪	ひろき世にひとりの友とわれをいひしその友うせぬさびしこの秋	心の花
1905	明治38年	6月	罪	世にまさばいかにわが為め嘆きまさむ親なき幸をいまぞしりぬる	心の花
1905	明治38年	6月	罪	わがすまばくるしき事のさてもありやよそめたのしき山かげの村	心の花
1905	明治38年	6月	罪	ゆくりなき別をつひのわかれにてわかれはてたる人の悲しさ	心の花
1905	明治38年	6月	罪	心ならず心のほかにゆくわれをこころづからと人やみるらむ	心の花
1905	明治38年	6月	罪	やうやうに思ひかへししかの折よ今はたつらく恨めしきかな	心の花
1905	明治38年	6月	罪	悲しさを胸にかくして何げなく人のうらみをきく夕べかな	心の花
1905	明治38年	6月	罪	一日一日いのちをぬすむ心地してなすこともなき身を耻づる哉	心の花
1905	明治38年	6月	罪	今更に何のおもねり世よ人よ吾をおひしは誰がなししわざぞ	心の花
1905	明治38年	6月	罪	しなばとてきゆべき罪にあらねばかむくいくるしき命なるらむ	心の花
1905	明治38年	6月	罪	命とは罪の重荷ぞ見よここにねぶれる人のいかに安けき	心の花
1905	明治38年	6月	罪	見おろせど闇の谷底何も見えず見えぬ力のわれを引入るる	心の花

1906	明治39年	1月	なみだ	あら玉の年のはじめの一日だになど忍ばれぬ涙なるらむ	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	涙なく悔なき一日もしあらば其ゆふぐれに死なむとぞ思ふ	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	ゆきあひし小さき枢人しれずむれにはなれて送りゆくかな	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	今日もすぎぬ今日のくるしさかくて過ぬあすいかならむあすのくるしさ	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	わが道のやみのゆくてに見えつ消えつほのかなる光われをもてあそぶ	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	奪れむためともしらず常しへにあたへられつと思ひけるかな	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	うれしとてうしとてまづぞ溢れ出る心あひの友よ涙とふ友	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	いかならむ千歳つめたき石となりてへなばへぬべき世にしあらか	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	うつし世に容れらるまじきわが望なりもならずもいかにかはせむ	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	名もあらぬ草にしあれどえにしありて君がみ墓に生ひしあはれなり	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	天も地ものろひの声を叫びいでて我身あざける木からしの風	心の花
1906	明治39年	1月	なみだ	流れこしさゆり掬ふとおりたてば岸の土くえて花は砕けぬ	心の花
1906	明治39年	3月	○	かなしさの限をききて別れ来しその夜おぼゆる雨の音かな	白すみれ
1906	明治39年	3月	○	たづね来て誰かはしのぶ我墓に文字もあらずな石もあらずな	白すみれ
1906	明治39年	3月	○	忘れじと思ふ思ひよいつしかと忘れ行くべきはじめなるらむ	白すみれ
1906	明治39年	3月	○	ゆきあひし小さき枢人知れずむれにはなれて送り行くかな	白すみれ
1906	明治39年	3月	○	今日も過ぎぬ今日の苦しさかくてすぎぬ明日如何ならむ明日の苦しき	白すみれ
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	つまれけりすてられにけりふまれけりすくせつたなき名もあらぬ花	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	思ひあまりふともらしつる一言をくむ人ありと思ひかけきや	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	さらに深き谷になげんとしばし我をささへし手にもすがりつる哉	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	つめたきは石のさがなり何しかもそのつめたさを恨みたりけむ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	いつはりの人の涙をぬぐはんとかたぶけはてしわがまことかな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	夢にあひし人もやあると夢に似し林のあたりそぞろさまよふ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	いひしらずうるはしかりきしかはあれど短かく消えし夢をしぞ思ふ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	うばはれん為とも知らずとこしへにあたへられつと思ひけるかな	あけぼの

1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	限なくうれしと思ひし一時の思ひ出つらき夕ぐれのそら	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	かなしさの限をききて別れ来しその夜おぼゆる雨の音かな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	わがうれひしばし忘れて人の上に涙をそそぐ夕まぐれかな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	さりげなくさらばとのみに別れゆく人の情を悲しとぞ思ふ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	人しれず人のまぎれに見おくりてしづ心なきわが思ひかな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	しばし世のおきてのままに別るとも友とばかりは思ひ出よ君	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	わくらはに人と生れしわがすくせ此すくせこそ悲しかりけれ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	また一日苦しき命加ふべくあけゆく空のうらめしきかな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	この上の何のくるしび何の恥しのびつくしし世にしあらずや	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	なるままになれよと且は思へどもなどこの思打すてがたき	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	胸に満つわがこの思ひなくばいかにやすけかるべきさびしかるべき	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	天も地ものろひの声を叫びいでてわが身あざける木枯のかぜ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	ゆきあひし小さき枢人しれず群にはなれて送りゆく哉	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	われだにも思ひすてつる我ぞかし人の友たる身にしあらしよ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	世の人はよし知らずともわが心なきものにしてひとりしのばむ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	わがすまば苦しき事のさてもありやよそめたのしき山かげの村	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	いはぬおもひいはぬなげきのもしあらばひそかに語れ山吹の花	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	ながれ来しさゆりすくふとおりたてば岸の土くえて花はくだけぬ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	見おろせど闇の谷底何も見えずみえぬ力の我を導入る	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	胸の底にひくくするとき声ありてわがかひなさをあざけるがごと	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	幸なさの我に似し人もしあらば語らんと思ふわが思かな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	とこしへににげゆくかけのあと追ひてむなしき道にうき身つかれぬ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	わが病いえずときけど母君も今はいまさず心やすきかな	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	かくまでの我身のはてを見ても思へみなしご安くすごされん世か	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	花の香にうつらうつらとさそはるるねぶりよとはにさめずしもあれ	あけぼの



1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	涙なく悔なき一日もしあらば其夕暮に死なんとぞ思ふ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	思ひ思ひ思ひつかれて墓に入らば苔の下にも思ひつきせじ	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	情あらばとふなあばくなうき事の限をひめし胸のおくつき	あけぼの
1906	明治39年	6月	にげゆくかけ	たづねきて誰かはしのぶわが墓に文字もあらずな石もあらずな	あけぼの
1906	明治39年	9月	天つ国	きえていにし昔のゆめにすかされていけるともなくいけるわれかな	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	天つ国いかにたふとき世なりともひとりゆかんはさびしからずや	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	いまはしきゆめよりさめて窓おせばつばさやぶれし黒き蝶まふ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	胸をやくうらみはいはじとこしへにすてし心ぞすてはてし身ぞ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	人のいひしわがつめたさを思ひ得てさすがに胸の安からぬかな	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	いかで一日心のままの一日あれよ思ひのままに思ひつづけむ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	夢の中に死ぬべき時をさとり得てねざめの床にいのりささぐる	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	なまじひに人の言の葉くみしりてしらずおかしし罪をしぞ思ふ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	しのぶれどあまりにつらき夕べかな我むねささむ剣かせ人	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	なき名おひて身はさすらへの十五年わがためうせし古里の人	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	つくづくとわが世にあきて人しれず念珠つまぐる雨の夕ぐれ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	あまりなる世のさかしらにいひとかん言葉もしらず罪にふししわれ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	この思ひ命と共にたたかはばますらを君もあはれと思はん	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	見るまみにさしぐむ涙おさへつつ病む子のためと守歌うたふ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	宮まあり神酒うけさするみどり子のまろき面わにあかしかがやく	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	かた言の蝶々蝶々にきき入りてたゆたひがちのちん仕事かな	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	かかる身を親とあふがばいかならむ我が子なきこそうれしかりけれ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	川ぞひのねぶの木かげに今日も又ほほづきうりのおうなやすらふ	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	たまさかに得し喜びも何かせむかなしびわけし人もあらぬに	心の花
1906	明治39年	9月	天つ国	ただ一つこの喜びを胸に満てて百千の思ひわすればはてばや	心の花